

Title	巻頭言
Sub Title	
Author	小池, 智子(Koike, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2014
Jtitle	Keio SFC journal Vol.14, No.2 (2014.) ,p.3- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 「スポーツ」の多様性を探る
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0402-1402--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集 「スポーツ」の多様性を探る

巻頭言

KEIO SFC JOURNAL Vol.14 No.2 特集編集委員

小池 智子

慶應義塾大学看護医療学部 / 大学院健康マネジメント研究科准教授

2019年ラグビーワールドカップの日本開催、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて様々な取り組みが始まっている。オリンピック競技のみならず、スポーツの社会的価値や可能性に多くの関心が寄せられ、このムーブメントがあらゆる世代の人々に広がりつつあることを喜ばしく思う。

スポーツ (sport) という言葉の語源は、ラテン語のデポルターレ (deportare) で、もともとは義務的な活動を離れた「気晴らし・休養・遊び」などを意味しているという。近代に入ると、一定のルールに従って競技する、いわゆる競技スポーツが一般的となり、現在のスポーツという言葉のイメージが定着してきた。かつてスポーツは、社会的にも経済的にも余裕のある者たちが、その余力においてスポーツに興じていたことから、「ラグジュアリー」なものとみられていた。しかし今は、世界中の多くの人々がスポーツに親しみ、あらゆる世代において、そして障がいの有無にかかわらずその価値が浸透しつつある。自らスポーツを「する」ことだけでなく、「みる」ことを楽しんだり、またコーチやボランティアとして「ささえ」たりと、人々のスポーツへの参加のかたちは実に多様だ。

高齢化・少子化など社会構造や技術革新などにより生活スタイルの変化が進む中、「スポーツ」は今や、私たちの社会や日々の生活に欠かせない重要な存在になっている。日本をはじめ多くの国がこれから超高齢化社会を迎える。高齢者へのスポーツ振興が、身体機能低下の予防や健康寿命の延伸に貢献し、医療費や社会保障費の削減にも寄与することはよく知られた事実だ。

本号の特集は、このようなスポーツの多様な機能に着目し、そこにある普遍的な価値と新たな可能性を探ることをねらっている。「スポーツ」を慶應義塾の歴史から紐解くとともに、「科学」、「健康」、「コミュニティ」、「ビジネス」

の4つの研究領域に焦点を当て、招待論文8本と投稿論文1本を掲載している。

最初の山内論文は、スポーツがもつ本来的な意味について再考に資する重要な問いを投げかけている。福澤先生が勧めた身体運動の理想形の一つは、独立した運動としてのスポーツとしてだけでなく、身体鍛錬と娯楽とが混然一体となったものであったようだ。彼の身体運動観とでも言うべきものは、日常的な起居動作や生活に密着した身体活動に則しており、興味深い。福澤先生の「目的を忘れた体育重視」への警鐘は、昨今の「シゴキ」や節度を失った勝負へのこだわりにも向けられるものである。

今日のスポーツを考える上で、科学はスポーツと切り離せない。スポーツ種目のパフォーマンスを向上させるには、科学に基づいたトレーニングやコンディショニングが不可欠である。アスリートやコーチの「カン」や「コツ」は重要だ。この「カン」や「コツ」をとらえるためのスポーツテクノロジーの進歩には目を見張るものがある。まさにエビデンス・ベースド・スポーツの時代だ。仰木論文、加藤論文、東海林論文における技術・戦術・戦略の分析法などを探る研究の知見は、スポーツをする側だけでなく支える側の役割や環境整備に関する理解を深めるものとしても珠玉のものである。

アスリートのパフォーマンス改善やけがの予防策、そして受傷後の復帰に向けたリコンディショニングが重要である。橋本論文は、これらの改善、予防、復帰という一連の流れが、将来的にはアスリートのみならず、高齢者や発育期の子供を含むあらゆる年代の人たちの健康管理に応用できる知識と技術であることを示している。小熊論文には、ヘルスプロモーションの指導者に必要となる健康増進技法と、人々が活動的で健康なライフスタイルを送るための様々な智恵が詰まっている。

地域社会のソーシャルネットワークが希薄になっている現代においては、スポーツがもたらす社会的機能にも大きな期待が寄せられている。松橋論文と村林論文は、地域スポーツとスポーツビジネスが、地域コミュニティの活性化に大きく貢献することを我々に示している。

運動習慣は生きがい感を高め、生きる力を沸き立たせる。飯田論文は高齢者スポーツの推奨のあり方などの観点から、健康寿命の延伸に関する日本のグッドプラクティスを世界に発信していくアイデアがあふれている。

最後に、近年注目されている「スポーツを通じた社会開発」にも触れておきたい。スポーツは目標に向かって努力することの大切さ、コミュニケーション能力、公正なルールに則って競う体験を共有することで、相手を尊重する

気持ちや規範意識を育み、社会生活で役に立つたくさんのことを教えてくれる、言わば“人間力を育てる場”でもある。スポーツは慣習という壁を破り、差別を超える力を持っているのである。

このようなスポーツがもたらす様々な効能を貧困削減へと向け、「開発」のプロセスの中で活用する「Sport for Development (開発を後押しするためのスポーツ)」の潮流が生まれている。この背景には、2003年国連決議で「教育、健康、開発、平和を創造する手段としてのスポーツ」が採択され、ミレニアム開発目標 (MDGs) を踏まえて「開発と平和のためのスポーツ」というレポートが国連から発表されたことがある。国連をはじめとする各国際機関において、開発プロジェクトをスポーツと連動させて展開し、そのなかで民族を融和させたり、教育や健康への意識を高めようという試みが始められている。

こうした「スポーツの力」を活用しようとする動きは、途上国だけでなく移民やホームレスといった社会的マイノリティの問題を抱える先進諸国においても展開されている。教育など社会サービスへのアクセスや雇用の悪化など、社会的な参加の機会の喪失状態が深刻な状況にある「社会的排除」の問題に取り組む上で、新たなつながりの構築の「場」としてスポーツの役割に期待が寄せられているのである。

「スポーツを通じた社会開発」のもうひとつの形が被災地支援だ。東日本大震災の被災地域では多くのスポーツ復興支援活動が展開された。避難生活者のエコノミー症候群対策のための運動プログラムや、スポーツによる被災地の子供たちの心のケア活動等である。また、災害時に地域スポーツクラブの果たした機能も大きい。クラブと地域住民との間の相互作用が災害時の復興支援に大きな効果をもたらしたことが多く報告されている。まさに、地域の公共財としての地域スポーツクラブの姿がそこにある。

今、地域社会や国際社会で顕在化している健康課題や地域社会の崩壊に向き合うとき、スポーツを教育や健康、社会開発のための道具として利用することに関心を持つ関係者が、分野横断的かつ学際的に交流し研究を促進することにより、解につながるいくつかのアイデアを見いだすことができるにちがいない。幅広い学問領域を総合的・学際的に学び研究することができるSFCから、スポーツの多様な社会的価値が発信されることを期待したい。